

結局身延山特に学校を中心に、「身延の松木」として身延山と凡てを一に行動し、生涯を身延山に捧げたということが出来る。先生としては自分の信ずる道、欲するところを一貫せられたわけで、「身延の松木」というにふさわしい御生涯であったと尊く思う。宗門殊に身延山に於て、かゝる師は今後余り出られぬのではないか。余程の仏縁なければ生れぬ師であったように思う。

宗門人としての生き方にはいろ／＼あろうが、先生の如きは或る意味で最も恵まれた偉なる御生涯であったと思う。「身延の松木先生」逝かれて、同窓の皆さんが、何んだか身延山に大きな穴があいたような気がすると言うのも人情としては止むを得ぬと思う。それ程松木先生は身延山の大きな存在であったことを今つく／＼と偲んでいる。

寂しい惜しい思いで一杯である。私の心の中にも現に大きく生きつづけていられる御縁を有難く思っている。先に小松浄祐師逝き、今松木本興先生を失う。今頃はさぞ霊山会上で仲の良かった伊藤日定上人も御一緒に何事かを語り合っていることであろう。たゞ感無量、謹んで増円妙道をお祈りいたします。（横浜・善行寺住職）

松木先生を偲ぶ

中 村 瑞 隆

普通中学を卒業し師匠の計いで祖山学院高等部に入学したのは昭和八年四月のことである。そして最初の授業は松木

本興先生の天台四教儀集註の講義であった。新入生を迎えてということもない。何巻目の何丁から始めるということもない。開口一番、扶律談常とはと説き出した。冠註と傍註がところせましと書いてある。どれが何処につながるやら、真新しい三冊の第一冊目の和本をひっくり返したが皆目見当がつかなかった。前後左右にも本をひっくり返している者がいる。また、中には朱のインク壘を側に朱筆で書き入れている者もいる。先生は我関せず笑いもしないで講義をされた。長い焦燥とあきらめの時間であった。新入生達はあの先生が松木先生かと顔を見合せたものである。松木先生は学生のアイドルであることを聞かされていたからである。

その頃祖山学院高等部は宗乗余乗で録えた付属の中等部から進学した者と、仏学を始めて勉強する一般中学を卒えた学生との混成であった。昭和八年四月の高等部一年の新入生は付属中学から二十余名、一般中学から二十名、合せて四十余名で当時とすれば大クラスであった。集註の時間の扶律談常の講義は付属中学五年から始められた連続講読であったのである。如響如啞であった私は早速先生に勉強方法を尋ねた。先生は西谷名目を読むことと法相を丸暗気することだと教えて下さった。一般中学卒の同輩二十名中には不定の化儀を受けている者もあったが、殆んどは華嚴の会座に坐する声聞衆であった。付属進学者達は齒がゆく見ていられなかったのであろう。われ／＼を一学期間は正式の同級生と認めないという決議をしたのであった。元兎は松井大周、小浦孝勝、古屋是聞などの諸兄であった。その決議はどのようにして学校当局の承認を得たのか、とも角実施された。高等部の学生は角帽・袴・改良服・下駄ばかり、付属中学は丸帽であった。高等部一年に入学を許可されながら、一年生と認められない妙な一年生は何の帽子をかぶるかが問題となって、松井兄達は大学の予科生は丸帽にジャバラと称する衣をまきつけているのに習って、改良服にジャバラのついた丸帽のいでたちがよからうということにした。当時の学科目は宗教学と哲学を除いて宗乗余乗

だけ、檀林制度の延長で文部省公認の専門学校ではなかった。従って、第一期の宗余乗の試験に合格したものだけが正式に一年生として角帽をかぶれることになった。この制度は専門学校に昇格するまで続いたのではないかと思う。思えば松木先生の四教義集註が遠因であった。そして法相を覚えるのが苦にならなかったのは先生のお蔭であった。

われ／＼は入学と同時に東谷の真新しい厚德寮に入った。厚德寮というのは名古屋円頓寺の平賀僧正が亡き奥様厚徳院の追善のために当時一万円を寄贈されて出来上ったものだと聞いた。今村是竜先生が寮監、灘上恵教先生が副寮監で、中高合せて寮生八十余名であった。娯楽室もあってラジオ・囲碁・将棋などもでき、ピンポン台もあり、東谷の猫額の地にも楽しさが溢れていた。印象的であったのはどの部屋からか絶えず木柵の音が聞かれた。それは読経の練習ばかりではなかった。昼寝をしている者の入口には忌中の紙が貼られ、側で大勢集って枕経を荘嚴に読んでいることもあった。

新聞には井上日召の血盟団の一人一殺や青年将校の五、一五事件が報ぜられ、国情は大きく右に旋廻していた。山中の身延は世間的刺戟には乏しかったけれども、ひたよせる右の風を感じ、日城の靈山としての雰囲気から夕食前には祖廟にぬかずいて四海帰妙の大願に挺身する勇氣を与え給えと念じ、若い情熱を発散させたものであった。

今村先生が御病気がち、学院始って以来の好成績を得られ、寮生から慕われた灘上先生は満洲靈廟にお出になって松木先生が寮監、多田慧秀先生が副寮監に就任された。両先生とも祖山はえぬきの筋金入り、われ／＼寮生のぐうたらには我慢がならなかったであろう。じわり／＼寮則が厳しくなった。給待第一の山則に従い、全寮生を七等分し一週に一度は本山の朝勤に出仕すること、残りの者は本山の朝勤に合せて寮内の礼拝堂において、読経のことと決った。本山の朝の大鐘がなり、やがて寮の起床の板木が谷に響くのを夢心地に聞きながら、また深い眠りに入る。若者

に朝勤は苦手であった。先生は硝子窓ごしに起こして廻られたものであった。

先生は無口であったが、祖師の棲神の地身延に学ぶ者の因縁の深重とその心得を繰返し教えられた。やがて寮生には二つの流れが出来た。一つの流れは先生の最も得意とされた雄弁熱が盛んになって、或者達は寺平に集って奥の院を仰ぎ、或者は塩沢の沢を見下して弁を練った。他の流れは夜中祖廟に参り唱題し祖師に直参しようとする者達とであった。

高等部三年の時私は市川大門で兵隊検査を受け酒を覚えたが、酒家の名声高かった先生から遂にお流を頂戴する機を得なかった。残念なことである。若し頂戴していれば私も先生のように飲んで飲まない奥義を会得していたかも知れない。

(立正大学教授・文博)

松木先生を追慕して

川 口 智 明

私は二十余年の永きに亘って先生と親しく接し、親子の様に慕い続けてきた一人である。松木先生の人柄は、穏和で清純温情溢ふれる方で、常に変らぬ態度で事に当たられ、学問と布教の文字通り行学二道の模範的実践を遂行せられた御生涯であったと想う。